

大陸（満州）

私の軍人軍属

としての三年余り

秋田県 加賀谷 兼 蔵

昭和十九（一九四四）年三月、徴用で相模原陸軍造兵廠に軍属として入所し、兵器の部品製造に従事して廠内での寮生活をしました。戦況は悪化するようで、そのうち米軍戦闘機が上空を飛び、機銃攻撃を受けるなど雲行きが悪くなり、さらにB 29爆撃機が上空を東京方向に飛ぶようになりました。わが方の高射砲の弾が、下から見ると命中したように見えるのですが、B 29は悠々と飛んで

行き、両者の高度差に問題があると分かって来ました。遂に東京大空襲となり、東京方面の空が赤く見えていました。

間もなく三月中旬に召集令状が来ましたので自宅に帰り、一泊してすぐ千葉県の市川市にある部隊に入隊、陸軍騎兵二等兵となりました。

三月二十日頃、市川市を出発し、九州博多港を出港、朝鮮釜山に上陸し、今度は貨車で北に向かい、満州に入って客車に乗り替え、大連に着き下車、歩いて郊外の周水子にある陸軍補充馬廠満州第三八〇部隊に入隊しました。

早速、騎兵として訓練を受けましたが、馬は初めてで苦労しました。種々の訓練を受け馬にも馴れたある日、分隊長が「隣の飛行場から戦闘機が

飛び立つが還つてこない、変だぞ」との話がありました。後で沖繩への片道飛行とのことでした。

そうこうして第一期検閲を受け、一等兵になって間もなく、対戦車壕を造る工事の監督に行き、満人を指導監督、工事を進め完成の目途もつきました。次は自分の隊の馬の防空壕造りとなり、隊内に円状に大きく壕を掘り、上には葉のついたアカシヤの木で覆い、何回も馬を入れる訓練をしましたりして、だんだんソ連を意識した訓練となりました。人間が武器となるようなやり方でしたので、これは大変だと思っていました。

八月二十日、日本の敗戦、降伏を部隊長が告げ、部隊長から「当部隊は、ソ連軍と交戦しなかったから捕虜にならないから心配するな。ただ何日になったら帰国できるかわからない。よって食糧が心配だ。明日から二食にして喰いつなぐので我慢して頑張るように」との訓示がありました。

た。

その後は部隊の倉庫を整理し、ある夜には部隊の馬を移動するためにハダカ馬に乗り、民間の牧場に併馬で一頭を連れて行き、翌朝徒歩で部隊に帰ったのですが、後になってソ連軍に取り上げられたとのことでした。

その後数日して、隣の飛行場にソ連の大型機が相当数着陸、間もなく部隊の明け渡しを命ぜられたのか武器や物資を取り上げられ、少しの糧秣と身の廻り品だけで、民間人の引き揚げた大きな建物に移動したのです。

そこでは将校食堂の食事の準備や後片付け、清掃と便所の掃除などで楽な生活でした。夜になると民家から警備を頼まれ、泊りがけで三人で行きました。ソ連兵が女を目当てに侵入するのを防ぐのですが、女の人は男装し、男の振りをしていました。ソ連兵は私達が軍服で木銃を持っているのを見て引き返すようで、私達は一泊して御馳走になって帰隊します。

そうこうしている中に移動を命じられ、今度は幾班にも分けられ、私達が数時間歩いて着いた所は金州陸軍病院建設現場でした。ほぼ完了した建物の後片付け作業で、捕虜生活になりましたが、ここまではそんなにつらいと思いませんでした。

十月も半ばに再び移動となり、二日も歩いて着いた所は大連港埠頭の倉庫で、これからが辛い生活の始まりとなりました。

翌日から各倉庫内の荷物を片っ端からトラックに積み込み、岸壁の貨物船に運ぶ作業で、時には船の中で積み下し作業もさせられました。が、経験がないので難儀しました。

全倉庫の荷を運び終わると、今度は鉄道貨物列車で分解して運んで来た大きな鉄製品、皆非常に重く、これを起重機で下し、コロに乗せ置場の奥まで運ぶ仕事でした。

この埠頭での仕事は二十四時間作業で、朝から翌朝まで一日休んでまた一昼夜と、本当に「ダワ

イ、ダワイ」「スカレー、スカレー」(働け働け、早く早く)の連続でした。積み下し作業が終わる頃またソ連の汽船が多数入港すると、今度は船に運び込む作業で、鉄板に乗せたものを戦車で船まで引つ張って行き積み込むのですが、今度は我々を船に入れませんでした。が、製鉄所と製油所の解体した物とのことでした。

運び終わったら移動命令が出て、今度はどこへ行くかも知らず、一日掛かりで歩き、明るくなったら、そこは旅順と分かりました。そして付近の学校の体操場に落ち着きました。人数が多くて狭く、小便から帰ると、自分の場所を見付け、もぐり込むのに大変でした。冬に向かう時ですから寒さには良かったと思いい我慢しました。

翌日から早速作業が始まり、元学校の改造工事で、鉄筋を組み、枠を付けた物にコンクリートを流し入れるのです。砂利は不揃い、セメントと砂を適宜に混ぜ、色を見て、この程度と判断して注入するものですから出来上がって枠を取り外す日

が心配でした。明日が杵取りとなると、早く出発して空際に穴埋めして仕上げ、検査官が来る前に補修して合格と苦勞の連続でした。

この工事がソ連軍の関東州司令部にするための工事であったのは後で知りましたが、この工事に従事したためにシベリア行きを免れたのでした。

ここで昭和二十一年の正月を迎えましたが、旅順市での様々の作業は毎日替わり、その日暮しの生活でした。

一月末に郊外の塩田跡地に移動し、テント生活となりました。ここには大きなテント群があり私達の幕舎には陸海軍の関係なく入れられ、同じ部隊の人も少なくなり、一等兵では肩身が狭いので肩章を捨て、同じ隊の人でグループを作り過ごしました。水の配給もなく地面を掘って水の溜るのを待ち、澄んだのを用いるのです。

ここでのラポータ(働くこと)は市内あるいは郊外と、その日暮しで苦勞しました。少しすると

ロスケは掛け算の九々ができないと分かりました。収容所を出るときは四列でゆき、歩哨の員数の把握を遅らせます。五列に並び替えると分かりません。行きは四列、帰りは五列と、時間を何分か得するようにしましたが、歩哨は毎日替わるので気付かないようでした。

このようにしてラポータ(働くこと)に出るうち歩哨と話すようになり、お互いに言葉が少し分かるようになったある日、ジャガイモの話となり、ロスケ(ソ連人は日本人をヤポンスキーと呼び、ソ連人はロスキーと呼ばれたと思うのか何とも思わない)は、コルホーズ(集団農場)の芋はこんなだと大きな輪を作り、自分の家のはこんなだと大きな輪を作り自慢するのですが、これでは共産主義など下々は関係ないと思われました。

また、将校宿舎の作業で薪割をしていると、近くのマダムが手招きするので行くと、割った薪を持ってこいとのことで後で持って行くと煙草をくれました。関東州は木が少ないのでシベリアから

運ぶので配給のようでした。

共産主義国でもそんなに変わらないと思いましたが、なかには人使いの荒いマダムもおり、暗くなっても仕事の終わるまで働かせました。帰るとき収容所に着きますと、収容所の歩哨は「ストーイ（止まれ）」と指示し、それに答えないと疑われるので、何とか答えないと駄目です。私は「ラポーナムノーガクスクスニャート（沢山働かせて食物もない）」と答えて入れました。かくしてマゴマゴして答えないと発砲、それで死んだ人もいました。

また夜になると急に寒くなるので、石油缶のストーブを当番で焚くのですが薪がなく苦劳しました。仕事の時は何でも燃える物を持って帰ることにして冬を過ごしました。コンクリート作業の枠などは小分けして皆でコッソリ持ち帰り薪にしました。

春早々郊外の倉庫の建設工事で「穴を掘れ」と

ツルハシを渡されましたが、地面が堅く凍っていて掘れず「ダワイ、スカレー（早くやれ）」とドヤされて閉口しました。ソ連人は体が大きく力も強いしこのようにと自分でやり示しますが、その体力の差はなんともならず、一日を過ごすのが大変なことでした。

しかし種々の労働で過ごしているうち六月に部隊長から進級の達しがあり、上等兵に進級しました。ある日突然「明朝移動する、すぐ準備せよ」と命があり、翌朝整列すると、そこには他のテントの人もおり、今までとは違うメンバーでした。

ソ連兵は例のように歩いて何時間の所に行くだけで、着いた所は戦車隊内の整理、清掃でしたが、自分達は炊事用の薪取りなどが仕事でしたので少し楽な生活となりました。翌朝、起きてみると近くに玉蜀黍畑トウモロコシがあり、これは秋までこの仕事が続けば良いと喜びました。

仕事は「後片付け」と「雑草取り」が主で、秋田で「スベラピロ」と言う雑草が沢山生えてお

り、食べられると聞いていましたが食べたことはありませんでした。茹でて食べている人がおりませんでしたので採って食べてみるとスッパくて食べられないので、干したらどうかとテントの上に置いてカラカラに乾いたので食べてみたら、ゼンマイの干したのと似た味でしたので皆で取って食べ尽くしました。

玉蜀黍が食べられる頃となり、皆が焼いて食べましたら、満人も気付いてソ連に訴えたともみえて、ソ連兵が来て殻を早く埋めて隠してしまえというのです。早速、埋めて知らぬ振りをしていると何事もなく、満人は急いで収穫して終わりとなりました。

ロスケが怒らないのは、その頃は黒パンの配給が途切れ勝ちで大豆ばかりが主となり、ために私達に強く出られなかったと思います。その後、黒パンの支給が三日も続けて無く大豆だけとなり、誰も食べられない。相談して、明日は腹が減り起きられないと起床しないことに決め寝していると、

朝に隣のテントの人が起こしに来ました。

事情を話して仕事に出ないからと寝ていましたら、ソ連兵が起こしに来ました。食べる物がなく起きられないと言ったらソ連兵は倉庫を見に行き、大豆を食って出ると言います。「日本では主食でないし、三日間大豆ばかりで、これ以上たべられない」と起きるのを拒否すると諦めて帰りました。

そこでまた寝ていると昼近くにソ連兵が来て「偉い人が視察に来るので何とか起きて働くような格好だけでもよい、必ず黒パンを持ってくる」との事で、午後四時までに約束通り（一人八つ切り）に持ってくるならと起床し、仕事をするふりで将校達の視察も無事に済み、帰って休みました。果たして四時までを持ってくるのかと待っているとキッチリ四時にパンを人数分持ってきました。その後は順調に食糧が配給されました。

そのうち夜中に強い秋風が吹き荒れ、テントが

破れ移動となりましたが、十二月中頃に、ある町外れの割と大きな建物の中で暮すことができようになり、冬になったので大喜びで、また仕事も楽で、日によって全く仕事の無い日もあり、年末になりました。

正月三日間は休みを与えるから町に出ても良いとなり、皆で金を出し合って町に出て酒（チュウ）と食物を買い、正月気分ですべて、翌日までゆっくり休みました。

ソ連の態度も変わったように見えてきた二月下旬に移動、旅順の塩田の原隊に帰りました。その後だんだんこの収容所に入る人数も多くなり、作業も炊事用の薪取りだけとなりました。そうしたある日「近く帰れるのでは」と噂が出て来ました。

そして「三月二十二日、明日大連に移動する。今日中に準備せよ」と命じられ、翌朝幕舎を出て大連まで歩き、埠頭の収容所に入りました。しかし「日本」か「シベリア」行きか乗船する船の名

を見ないと分からない状況でした。

三月二十六日午後九時、乗船の命があり岸壁で船の名を見ると「大瑞丸」とあり安心して乗船しました。翌朝大連港を出発、帰国の途に着き、三十日午後三時、佐世保に入港、四月一日午前六時下船、検疫を受けて南風崎の宿舎に着き、壁の全国地図で秋田市土崎地区が赤く塗られ爆撃されたことになっていて自分を見て自分の家が心配になりました。

五日午後二時、南風崎駅発車、帰途につき、八日上野駅で下車し青森行きの発車までの時間に外に出てみました。アメ横の掘っ建て小屋で羊羹を買い汽車にりましたが超満員で、やっと床に腰を下し眠りました。

翌日、秋田から土崎駅に近づき何の変化もない風景に自分の家も無事と希望が出て来ました。土崎駅で下車、家に着き「ただいま」と言うと、母が出て来てアッと驚き「タマシ」（幽霊）ではないかと言ったが、この通り足があるとバタバタし

て見せて安心させました。御飯を頂きながら、秋田港北部の日石製油所は爆撃で全滅、秋田港も被害甚大と聞きました。一服して土産の羊羹を出す。と半分位に小さくなって、カバンの中は水が流れる程で大笑いとなりました。今考えてみるとこの戦争には戦術があったが戦略がない戦いであったのではと思います。

【解 説】

体験記筆者は、昭和十九年三月、徴用軍属として相模原陸軍造兵廠に入所、兵器の部品製造に従事した。

三月、召集令状により陸軍騎兵二等兵となり、大連郊外の周水子にある陸軍補充馬廠満州第三八〇部隊に入隊、騎兵として訓練を受けた。第一期検閲後は、満人を指導しての対戦車壕を造る工事に従事する。

しかし日本の敗戦となり、数日して、隣の飛行場にソ連の大型機が相当数着陸、部隊の明け渡し

を命ぜられた。

その後、金州陸軍病院建設現場の後片付け作業や大連港埠頭倉庫での辛い捕虜生活になった。そしてソ連軍の関東州司令部の工事に従事したことによりシベリア行きを免れ、昭和二十一年の正月には旅順市での、その日暮しの作業生活を繰り返す。

ようやく三月二十六日、「大瑞丸」に乗船の命があり、翌朝大連港を出発、三十日午後三時、佐世保に入港、帰国した。シベリア抑留を免れた、大連での捕虜の作業生活に終始した体験の記録である。